

<ラウンドテーブル報告3>

初年次教育と専門教育はつながるか？

【企画者】 榎本達彦 (明星大学)
【司会者】 榎本達彦 (明星大学)
【話題提供者】 榎本達彦 (明星大学)
塩沢一平 (山梨学院大学)

1. はじめに

話題提供者1の榎本はこのラウンドテーブルの企画者でもある。今回の話題提供では、この企画を立てた意図をお伝えしながら、問題提起とした。

話題提供者2の塩沢は、所属する大学内で、まさにラウンドテーブルのテーマとなる初年次教育と専門教育の接続を考え実践した体験から、話題提供をした。

なお、参加は企画者と話題提供者を含め19名であった。

2. 課題提供1

(1) 明星大学における初年次教育—「自立と体験1」の流れ—

明星大学は2006年度に現在の「自立と体験1」の前身である「自立と体験」を学科共通科目(一部学部共通科目)として開設した。全学科の必修科目として位置づけていたが、実際には学科ごとにバラバラの内容で行われ、明星大学に入学した1年生に伝えたい共通の到達目標等は必ずしも共有されていなかった。

そこで、2010年度より「自立と体験」を再編し、全学共通科目として再出発したのが、現在の「自立と体験1」である。「自立と体験1」の開設と同時に、学内に新しく「明星教育センター」が設置され、「自立と体験1」の内容の改訂、授業の運営等を進めることとなっ

た。「自立と体験1」の開発および明星教育センターの設立に関しては、初年次教育学会第3回大会と第7回大会での自由研究発表、および明星教育センター紀要に報告されているので、関心のある方は参照されたい。

「自立と体験1」の主な特徴をあげると、①全学共通科目の必修科目であり、②明星教育センターの教員と各学部から推薦される専任教員約50名でクラスを担当している。③クラス数は67および68クラスで、1クラスの人数は30名となっている。また、④学部横断のクラス編成を行っている。⑤テキストは明星教育センターの教員が作成し、授業開始前に担当する専任教員に授業内容の説明やグループワークの手法の体験研修等を行い、授業に臨んでいる。

(2) 「自立と体験1」実施から6年—学生への影響／効果—

以上が「自立と体験1」の概要だが、2015年度で6年目に入っている。「自立と体験1」は、①大学に居場所と仲間を作る、②4年間学ぶ大学について知る、③4年間の大学生活を描く、という大きな3つの柱で進められる。毎回の授業では、コミュニケーション、人間関係、グループワーク、取材、観察、社会への関心等々様々な仕掛けが設置されている。

現在では、大学に在籍しているすべての学生が「自立と体験1」を受講している(2010年

以前に入学した留年生等はこの授業を受けていない)。このことが具体的にどのような影響や効果として現れているのかは、きちんとした調査がまだできていない。大学全体として改善された点とすれば、留年・退学者が減少したことである。ただ、それが全て「自立と体験1」との効果測定については、まだ分析での結果までは至っていない。

また、学生アンケートでは、「他学部に友人ができた」、「人と話をするに苦手意識がなくなった」、「これを機に大学で学ぶことを考えた」といった意見が多く見られる。担当教員からは、「学生が活発になった感じがする、ゼミなどでも発言が増えた」という意見がある。さらに別の意味で、「この授業を担当することで、グループワークや授業で使っている手法(符箋を使う)などを自分の専門の授業で取り入れている」という声も少しずつ聞かれるようになっていく。

実施運営側の立場から言えば、学生たちの大学生活は授業のみならず、少しずつ変化してきているのではないかと、またその一端を「自立と体験1」が担っているのではないかと実感している。その意味で、学生の大学生活のある部分について、初年次教育が何らかの効果を出していることは間違いのないように思う。勿論、今後その効果測定をきちんと進める必要がある。

(3) 初年次教育は専門教育につながるのか —6年間の実践からの問題意識—

一方で、大学生活のなかで一番比重の大きいのはやはり専門科目の学びであることも間違いないことだろう。つまり、小学校、中学校はもちろん、高等学校と大学との大きな違いは専門教育にある。上述したが、この授業を担当した一部の教員からは、初年次教育の手法を授業に取り入れるなど、初年次教育と専門教育のつながりを感じさせるような意見が出ているが、この件について明確に調査し

た研究・論文等はあまり見られないようである。大学に初年次教育を導入することの意味を考えるとしたら、やはり教養教育と専門教育においてどのような効果や意味があるのかを明確にする必要があると考える。

今回、初年次教育学会でラウンドテーブルを提案した問題意識はこのあたりにある。実際企画者である筆者が、初年次教育と専門教育の関係について、具体的に調査したり、素晴らしい考えを持っているということではないが、初年次教育の大学への導入の次のテーマとしては、「専門教育とのつながり」ではないかという、「直感的な」企画である。

(4) 各大学の実践を通して考える—今後に向けて—

具体的には、塩沢先生に発表いただく山梨学院大学での実践をもとに話題提供1、またフロアからは山形大学での渡井提供2と2つの話題提供を得た。その後、2つの話題提供を題材にグループワークで問題を深めた。企画を立てるにあたって、「初年次教育と専門教育の関係はこうだ!」というような結論を出すというよりも、今後の課題として初年次教育と専門教育をどう考えるのか、どの方向でどのような研究や調査が必要なのか、という結論のひとつ前の段階を意識していた。

3. 話題提供2

提起内容の項目は下記の通りである。詳細は2015年度「発表趣旨集」を参照のこと。

- ① 同じタイミングで同じ課題・悩み
——初年次教育と専門教育との接合——
- ② 導入は早かったが、バラバラで暗中模索な初年次教育
- ③ 急速に発展・爆走する? 初年次教育
- ④ そもそも初年次教育は「基礎演習」(一般教養配当科目)だけか?
- ⑤ 卒業時・出口から逆算する初年次教育
——内容がハッキリしない〇〇力——
- ⑥ 学部専門教育への「橋渡し」としての初年

4. 話題提供 3

フロアからは山形大学の松坂暢浩先生から下記の話題提供があった。

(1) 山形大学の初年次教育(基盤教育)について

1) 基盤教育院の設立

平成20年7月から新しい教養教育の在り方の検討を進め、平成22年4月の入学者から、従来の教養教育を「基盤教育」と改め、4年間の学士課程教育の基盤となる教育がスタートした。

2) 学士課程教育における基盤教育の位置づけ

山形大学の学士課程教育では、自立した一人の人間として力強く生き、他者を理解しともに社会を構成していく力を養うことを目指している。そのため基盤教育では、学問の実践に必要な基本的能力と健全な批判精神に裏打ちされた幅広い知識とを身につけさせ、大学での学習及び生涯にわたる学習への基盤となる力を養うことによって、社会に参画し運営していく良識ある市民としての力を育むことを目的に取り組んでいる。

3) 基盤教育の基本姿勢

①「人間力」の育成、②健全な批判精神に裏打ちされた幅広い教養の養成、

③自立した個人として社会における責任を果たす態度・志向性の養成

4) 科目構成

基盤教育は、「導入科目」「基幹科目」「教養科目」「共通科目」「展開科目」の5つで構成。

①「導入科目」：大学での学びの基本を身につける科目。→少人数のグループによるスタートアップセミナー、アドバンスセミナーの開講。

②「基幹科目(人間を考える)」：「人間」と「共生」をテーマに学問的志向性を育む

科目。→自然・社会・文化など、多様な学問的な視点から人間と共生を考える授業を開講。

③「教養科目」：学問の多様性を知り、知識の幅を広げる。→専門分野に関わりなく、幅広い視野と教養を身に付けるために、特に地域に出るフィールドワークやインターンシップなどの授業にも力を入れている。

④「共通科目(キャリアデザイン)」：学問の実践に役立つ知識や能力を修得する→共通に学んで欲しい科目群として「コミュニケーション・スキル(英語や初修外国語)」「情報リテラシー」「健康・スポーツ」「サイエンス・スキル」「キャリアデザイン」の5つから構成されている。

⑤「展開科目」：高年次に新たな視点で学ぶ→高年次においてそれぞれの専門領域にとどまらず、より広い視野と健全な批判精神を養うために履修する科目として学部ごとに開講。

5) キャリアセンターが主体となり取り組むキャリア教育

現在キャリアサポートセンターが中心となり、基盤教育のなかで、「自己理解(キャリアデザイン)」、「社会理解(キャリアデザイン)」、「仕事の流儀～プロに学ぶ仕事のやりがい～」、「低学年向けインターンシップ」の4つの授業を開講している。いずれも、本学が掲げる人生を強く豊かに生きていくための「人間力」を高めることに主眼を置き、3つの問い(どのように生きるか? どのように働いていくか? どのように学んでいくか?)を通して、学生一人ひとりの社会性の習得と確立(自立と適応)を促すことを目指し取り組んでいる。

(2) 山形大学の初年次教育(基盤教育)のこれからについて(個人的な私見も踏まえて)

①総合大学のメリットとデメリット(物理的課題)→様々な学部の学生同士での学

び合いができる一方、2年次以降のキャンパスが学部により離れてしまうため、次年次以降の教育をどう展開していくか課題となる。

- ②専門教育との接続(専門との接続の課題)→初年次教育を通して「大学生活でどのように学ぶか？」を考える機会の提供はできているが、まだ専門を意識した年次進行に合わせた教育体系まではできていない。
- ③山形という地域を活かしたフィールドワーク(地域連携の課題)→初年次教育におけるアクティブラーニングの1つとして、豊かな自然をフォールトとして、そこで生活する地域住民との交流ができる点は、地方ならではの特徴である。しかし、将来的に全学必修化する場合や教育的効果の高いプログラム開発に向けた取組のためには、マンパワーが足りないなど課題も多い。また、地域に大学が少なく、地理的にも距離があるため、大学間での連携が難しいという課題もある。

5. グループワーク

上記の話題提供の後、参加者を3グループに分け、グループワークを行った。グループワークのファシリテーターは榎本が担当した。

(1) 個人ワーク

- ①3つの話題提供、②各大学の現状などを加味し、テーマの「初年次教育は専門教育につながるか？」に即した意見、コメント、感想を付箋に記入する。

(2) グループワーク

- ①書いた付箋をテーブルの真ん中に貼りだしながら、簡単な説明(グループで共有)
- ②張り出された付箋をもとに、グループでテーマについて討議をし、グループの意見を取りまとめた。

(3) クラスで共有

各グループの意見をクラス全体で発表した。それぞれの意見は下記の通り。

1) グループ1

- ①初年次教育と専門との間の物理的ギャップをどう埋めるか

②縦割り教育の打破

- ③繋がるためのコアは理念

2) グループ2

- ①専門教育にアクティブラーニングを導入

②学部という垣根を超える

- ③アウトプットの重視

3) グループ3

- ①初年次教育と専門教育の連携の必要性を確認

②初年次教育と教養教育の関連も大切

- ③連携すべき内容について議論をすべき

4) グループ4

- ①「初年次」という呼称がわかりにくい

②大学内部で初年次教育が軽視されている

- ③初年次教育が無くなるのが理想

6. 最後に

企画意図で述べたように、今回のラウンドテーブルでは、結論をだすことよりも問題の掘り起こしが主要な目的であった。実際には問題の掘り起こしの端緒は見られたが、それよりも前の時点の問題が浮き彫りになった。

それは、まずはそれぞれの大学で実施している初年次教育と専門教育について、実践的な視点での議論を重ねる必要性である。今回のような議論を時間をかけ、回数を重ねて行く中で、初年次教育と専門教育とのつながりに関わる本質的な問題が見えてくるのではないだろうか。

最後に、ラウンドテーブルに参加された皆様に感謝の意を表して報告とする。